

ネット社会という船に乗って

僕の仕事がなくなってしまう！

文 佐渡島庸平

text by Yohei Sadoshima

世の中にクリエイターになりたい人は多いが、クリエイターを支える人、編集者になりたいと思う人は少ない。だから、AIの発達とともに、クリエイターが代替されるということが話題になるが、僕からすると「何をおっしゃいますか」という感じだ。先にAIに代替されるのは編集者だ。もはや現時点でのAIのフィードバックは、人間の編集者のそれよりも、大抵優れている。AIよりもいいフィードバックができるリアルな編集者は1%もないのではないか。

僕の仕事がなくなってしまう！これからどうすればいいのだろう!?一瞬考えたが、冷静になるとそのような不安になるのは不思議なことだ。僕はコルクという会社を経営している。社員を育てるのは、僕の代わりに編集をできる人を増やしたいからだ。AIがやってくれると何に困るのか。編集者という仕事は多面的だ。フィードバックをしなくなっても、することはたくさんある。一機能だけがなくなったからといって、必要じゃなくなるわけではない。

僕は父親だが、父親の役目は家族のために稼ぐだけではない。稼ぐという行為は具体的に機能的だ。しかし、父親として期待されているのは、収入を得ることだけじゃない。子どもに愛情を持って接する。そのような行為は、計測もできなければ、何をもって十分とするかも違う。しかし、重要だ。

機能的で具体的なものをどんどんAIやロボットに代替してもらえば、そこからこぼれ落ちたものが人の仕事になる。白物家電が充実し、Uber Eatsなどで食事は玄関に届けてもらえるようになった。それでも相変わらず、母親は忙しい。人は、人と関係を築くことに最も時間を費やす。

編集者という仕事も、AIによって作業が代替されると、関係を築くきっかけとなる場所が変わるだけで、これからもきつと忙しいのだろう。一つの機能しかなかった職業は、代替されると世の中から消えていく。複数の機能が組み合わさっている職業、感情との向き合いをしている職業は、いつまで経ってもなくならず、形を変えていくのだと僕は思っている。



Profile

株式会社コルク 代表取締役  
2002年講談社入社。週刊モーニング編集部にて、『ドラゴン桜』（三田紀房）、『働きマン』（安野モヨコ）、『宇宙兄弟』（小山宙哉）などの編集を担当する。2012年講談社退社後、クリエイターのエージェント会社、コルクを創業。著名作家陣とエージェント契約を結び、作品編集、著作権管理、ファンコミュニティ形成・運営などを行う。従来の出版流通の形の前にあるインターネット時代のエンターテインメントのモデル構築を目指している。